

[資 料 1]

2011年度事業報告書

財 団 法 人 東 洋 文 庫

2011年度財団法人 東洋文庫事業報告書

財団法人 東洋文庫
理事長 榎原 稔

2011年4月1日から2012年3月31日までに行われた財団法人東洋文庫事業報告の概要は下記の通りです。

事業項目

I	調査研究.....	2
II	資料収集・整理.....	9
III	研究資料出版.....	10
IV	普及活動.....	10
V	学術情報提供.....	13
VI	地域研究プログラム.....	17
VII	受託研究.....	18

I. 調査研究

以下の研究活動を実施した。

A. 超域アジア研究

超域アジア研究部門

(1) 現代中国研究班

「現代中国の総合的研究(2)」

現代中国は、政治、経済、社会の大改革を行い、その影響力は東アジアから広く世界に及びつつある。この動態を、歴史・文化の要因をも視野に収めながら、総合的に捉える研究体制(資料、政治、経済、国際関係・文化の各グループで構成)を構築した。資料の収集は東洋文庫の蓄積を基点としつつ、学際的研究と公開利用に向けて拡充と再編をはかる。その際、台湾中央研究院や中国社会科学院、ハーヴァード燕京研究所との学術交流など、海外・国内の研究機関との連携をいっそう強化し、政治、経済、国際関係・文化グループは研究会の開催を継続実施し、次年度以降における成果の刊行に備える。

[研究実施概要]

- a) 資料グループは、継続してきたモリソン・パンフレットの系統的な調査・研究の結果をとりまとめ、『モリソンパンフレットの世界』(東洋文庫和文論叢75)を刊行した。
- b) 政治グループは、政治・経済・行政・社会・法律各分野の専門家で陳情に関心を持つ中堅・若い研究者をメンバーとして隔月一回程度の研究会を実施した。
- c) 経済グループは、「歴史的視野から見た現代中国経済」研究の第2部として、毛沢東時代の「社会主義経済」にかんする再検討を継続し、中国から現代中国経済に関する研究者を招いてシンポジウムを開催した。
- d) 国際関係・文化グループは、前年度に続き、全体的な研究テーマ「戦後中国の国際関係と社会・文化変容」のもと、2ヶ月に1回程度の研究会を開催した。また、2012年度よりあらたに「1950年代中国の研究」を開始するため、その準備として研究会を実施した。
- e) 政治グループ、経済グループ、国際関係・文化グループとも、図書資料の購入に関しては、東洋文庫の現代中国研究資料センターと提携して、系統的な収書を行った。

(2) 現代イスラーム研究班

「現代イスラームの超域的基礎研究

—議会主義の展開と立憲体制に関する一次資料の収集と比較分析研究—

世界の近現代イスラーム研究において、これまでほとんど用いられることのなかった中東諸国の議会文書(アラビア語、ペルシア語、トルコ語)を収集・整理・分析し、それぞれの地域(国家)に誕生した議会主義の政治思想と立憲体制の実態を比較・検討する。2009年度からは、新たに中央アジア諸国を比較の対象に加え、基本資料の収集と整理・分析を行う。これによって中東・中央アジアなどのイスラーム地域における国民国家の歴史的役割と今日的意義を一次資料にもとづいて総合的に考察する。他方、イスラーム関係資料の収集と整理、データベース化を推進し、日本における資料センターとしての充実をはかる。

[研究実施概要]

現代イスラーム研究班の活動は、資料の性格に対応してアラブ、イラン、トルコ、中央アジアの4グループに分かれて実行される。アラブ、イラン、トルコグループの研究は、第1期(2003年-2008年)の実績を踏まえて実施された。

- a) アラブグループ: *A Guide to Parliamentary Records in Monarchical Egypt* (東洋文庫、2007)を利用して、議会文書の解説・分析を進めた。
- b) イラングループ: 2005年度に作成した議会文書のインデクス(CD-Rom版)を利用して、議会文書の分析を進めた。また、『1945-46年のモクリー地域におけるクルディスタン民主化運動の研究』の編集作業を行った。

- c) トルコグループ:2006年度刊行の論文集『トルコにおける議会制の展開』を基礎に、関係資料の収集と議会文書の解析を進めた。
 - d) 中央アジアグループ:2009年度に引き続き関係資料の収集と整理を行った。
- 以上の成果は、『全訳 イラン・トルコ・エジプト議会内規』として、2012年度に刊行する。

B. アジア諸地域研究

1. 東アジア研究部門

(1) 前近代中国研究班

①「古代地域史研究—『水経注』の分析から—(2)」

本研究班では地域史という視点から、中国古代の地域社会の構造を検討してきた。その基礎となるのは『水経注』(原典6世紀、中国最古の地理書)とその諸注の再検討である。これを注文、疏文まで精読し、加えて考古学上の諸発掘成果およびランドサット衛星地図などと合わせて分析するという歴史地理学的方法による研究に挑んでいる。また流域の古代遺跡と『水経注』記載の内容を合わせて検討することで、歴史的な自然環境・社会的実態を具体的に理解し、流域の地域社会の構造の変化を明らかにしていく。刊行を予定している『水経注疏訳注』渭水篇下巻及び洛水・伊水篇訳注もこれらの成果を反映させたい。渭水下流域及び洛水・伊水流域は「黄河文明」の中心地である。ここを「地域史」という観点から分析することは中国古代史研究においては新鮮な視点であり、『水経注』の研究という範疇を超えて、内外における中国古代史研究の新たな展開となる研究を目指している。

[研究実施概要]

- a) 陳橋驛復校『水経注疏』(江蘇古籍出版社刊)をテキストとし、「巻15洛水/伊水」の講読を隔週の研究会において実施した。
- b) 「張家山漢簡」の購読と分析を進めた。

②「宋代社会経済史用語解集成の作成とその電子辞典化」

本グループがこれまでに作成・公刊した『宋史食貨志訳註(一)～(六)』(東洋文庫刊、1960年～2006年)、および『宋会要輯稿・食貨篇・社会経済用語集成』(東洋文庫刊・2008年)における訳註および用語の収集の成果をベースとして、整理と増補を加え、広範囲かつ多方面の利用者の便宜に適合するような冊子体およびCD-ROMの用語解説集を作成し、研究活動のいっそうの発展に資するプロジェクトである。

[研究実施概要]

- a) 2007年度以来採集してきた用語およびその解説原稿を整理し、『中国社会経済史用語解』として刊行した。

③「東アジア都城の考古学的調査・研究(3)」

本研究班では、渤海を中心として東アジアにおける都城の比較研究を行ない、その研究成果として2004年度に『東アジアの都城と渤海』(全394頁)を、2006年度に『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』を公刊した。しかしその中心となる渤海上京龍泉府址(東京城)出土遺物の調査・研究は、予想以上に多数の遺物があったため、一部の遺物の調査・研究を継続実施する。

[研究実施概要]

- a) 長春、延吉、牡丹江市の渤海遺跡を踏査し、その資料と遺物について調査をおこなった。

④「前近代中国民事法令の変遷」

宋代以降の戸婚・田土・錢穀などを扱う「民事」法令を分析し、どのように変遷してきたかを明らかにする。中国の各時代の様々な法についての研究の中でも、近20年の特徴のひとつとして、法令の有効性、厳格性などを版牘文や契約文書によって検討する研究がなされてきたことがあげられる。契約文書や多くの条例、版牘文などが発見され、また中国国内にあるものが利用しやすく

なったことにもよろう。本研究班も過去5年間、この方向で研究活動をしてきた。この5年間の研究をとおして、あらためて法令そのものに視点をあてる必要があることに到った。民事的な法令に限ったのは、社会状況を反映しやすく、社会の実態の変化を分析するに適していると見ているためである。一度できた法は常に現実社会に適合しにくくなってゆが、時代を通して考察することにより、漢族社会の大きな変容をつかむことができると考える。

[研究実施概要]

- a) 2010年度に引き続き、宋～清の条例の収集を進め、特に宋・元期の文献資料について目録作成作業を行った。
- b) 収集した条例の整理、解説を行うべく、メンバー以外の研究者もふくめ、定期的に研究会を開催した。

(2)近代中国研究班

「20世紀前半日本の中国調査」

本研究は、近代中国研究班が、それ以前の近代中国研究委員会時代から引き継いで行ってきた研究で、1910年代から40年代にかけて日本の諸研究調査機関が、華北を中心とする中国で実施した調査活動に関する資料収集とその分析を継続するものである。従来の日本側資料に加え、本研究では中国側資料の検討も行い、華北を重点としながらも、地域的特質を検討するために、華中南を含めて全国的規模に対象地域を拡大する。そして日本側および中国側資料の活用について、近年の研究成果を踏まえながら、新たな視点から再整理をはかり、20世紀前半期の中国社会の全体像を考察する。さらに戦前・戦中期の日本の研究機関等による中国実態調査資料の収集を継続するとともに、中国の研究機関等との共同研究を発展させる。過去に、中国社会科学院、上海市档案馆、青島市社会科学院、山東社会科学院などとの共同研究により、日本国内外に散逸していた近代中国研究にとって必要不可欠な資料の収集を実施してきた。本研究では、新メンバーの加入を契機に、交流拠点を北京大学や南開大学、山西大学および南京大学等に拡大し、中国近現代史に関する重要資料の散逸を防ぐためにも、東洋文庫に資料を蓄積し、その分析を進めて目録・解題等を作成し、日中両国の共同研究を発展させる。

[研究実施概要]

- a) 2012年2月12日に国際シンポジウム「華北の発見」を開催し、①地域概念としての華北、②華北の農村と社会、に焦点をあて、2009年より実施してきた戦前期日本の華北調査に関する研究についての報告を行った。報告者は本研究班のメンバーに加え、張利民氏(天津社会科学院)、張思氏(南開大学)、江沛氏(南開大学)を招聘し、リンダ・グローブ氏(ハーバードイェンチン研究所)にも報告を依頼した。また、コメンテーターとして笠原十九司氏(都留文科大学)、光田剛氏(成蹊大学)が参加した。
- b) 上記シンポジウムの成果をとりまとめ、2013年に『調査資料を通して見た華北の地域概念』を刊行するため、研究会を行った。
- c) 研究成果の一部を、『近代中国研究彙報』に発表した。

(3)東北アジア研究班

①「日本所在近世朝鮮文献資料研究(2)」

京都大学附属図書館、天理大学附属図書館今西文庫をはじめ、日本各機関・個人が所蔵している、2004年度以来継続してきた朝鮮近世の記録類の第2次調査を行い、解題目録の完成を期する。従来、近世朝鮮のいわゆる朝鮮本と言われる古典籍については、総合的な調査が進行し、ある程度その全貌が解明されてきた。しかし主として成冊と言われる、帳簿を中心とした、地方資料・民間資料などの記録については、全体的な調査がほとんど行われてこなかった。第1次調査では、すでに原地に残存が確認されていない資料を発見し、内容分析を行ってきた。第1次調査と今回の第2次調査によって、ほぼ日本における該当資料は悉皆的な調査を行うことができる。

[研究実施概要]

- a) 『日本所在近世朝鮮文献記録類解題II』の刊行にむけて、準備作業を進めた。

- b) 東京大学総合図書館所蔵資料や京都大学附属図書館所蔵資料を主要な対象として、個々の調査資料の分析やそれらの諸資料が日本に将来された経緯の調査・研究を行った。

②「清朝満洲語檔案資料の総合的研究(2)」

清代の第一公用語である満洲語は、清初ばかりでなく、清朝一代にわたって用いられた言語である。18世紀の乾隆帝代より、京師に暮らす旗人たちは、日常語として漢語をもちいるようになっていったが、文章用語としての満洲語は、民国にいたるまで継続して利用された。現在、北京・中国第一歴史檔案館には、約1千万件の文書資料が保存されているが、その半分は、満洲語(または漢語とのいわゆる合璧)によって記されたものである。このことは、清代の文書伝達体系全体において、満洲語の利用が不可欠であったことを示している。とくに入関前(1644年以前)および清初の時期の文書・書籍、ならびに旗人、藩部をはじめとする辺境地方、そして対外関係等の文書において、多くの場合満洲語が用いられている。本研究は、これら満洲語で記された、または場合によっては印刷された清代の文献資料について、清初期を中心として総合的に検討を加えようとするものである。

[研究実施概要]

- a) 清初の「内国史院」関係文献と『鑲紅旗満州衙門檔案』の研究を実施した。
- b) 『内国史院檔天聰五年Ⅱ』の編集作業を行った。
- c) 崇徳年間分の檔案研究を継続した。

③「清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析(2)」

中国では北京オリンピック開催準備をめぐる国家事業が急進するなか、それまで内在していた政治・経済・民族・文化問題がチベットをめぐる自治区の問題に端を発して表面化し、その影響は広く中央アジア・北アジア領域世界にも及んだ。そこには、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を進展させた清朝の最大版図が直接に現代中国と繋がるなか、その一体化から生じた政治・経済・民族・文化の問題も現代中国に直結していた反映と捉えられる特徴が多々窺える。本研究班では、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を独自に進展させた清朝の国家領域構造と対外関係の問題を総合的に研究・分析してきた。刊行予定の英文論文集にその成果を反映させると共に、引き続き清代東アジア・北アジア諸領域における歴史的構造の全容を総合的に捉える研究体制を構築するべく、清朝の国家領域構造と対外関係を分析する上で不可欠な檔案(公文書)類のうち、保存収蔵状況が未詳な檔案類を中心に体系的に蒐集、整理、デジタル化し、向後の研究に貢献することを目的とする。

[研究実施概要]

- a) 清代中国西南民族史の各専門研究領域をもとに、既成の領域世界・時代区分の枠を越えて海外における図書館・檔案館・研究機関などに所蔵されている檔案文献史料類の史料調査・現地調査を実施して整理・分析作業を行った。
- b) 上記の文献史料類について、目録作成を進めた。

(4) 日本研究班

「岩崎文庫貴重書の書誌的研究(2)」

東洋文庫所蔵の岩崎文庫には日本の文化・文学・言語を研究する上で重要な典籍が数多く所蔵されているが、その書誌的調査は未だ十分にはなされていない。2009年度までに室町時代以前に成立した古写本・古版本についての書誌解題(I~VI)を公刊してきたことを受けて、ひき続き近世の成立ないしは刊行の貴重書を調査して研究の基盤を整備するとともに、その成果を広く公開することをめざしている。

[研究実施概要]

- a) 江戸期刊行・成立の歌書約100点について、書誌調査を行い、研究会を催してその資料群の全体像の把握に努めた。
- b) 上記a)の成果を『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅶ』として公刊するため、編集作業を進めた。

2. 内陸アジア研究部門

(1) 中央アジア研究班

①「サンクトペテルブルグ所蔵古文獻の研究－ウイグル文を中心として－」

東洋文庫が入手したサンクトペテルブルグの東洋学研究所のマイクロフィルムのうち、ウイグル語とソグド語については『東洋文庫所蔵St.Petersburgウイグル文字・ソグド文字・マニ文字写本マイクロフィルム仮目録[第1稿]』として、初期の現地での実見データの一部を取り込んだフィルム番号整理一覧を、2002年に刊行した。その後、マイクロフィルムのデータを昨年までのプロジェクトでデジタル整理を続けた。ほぼ完成に至った目録の改訂版を原稿とし、冊子かデジタルデータの形で編集し直して刊行することは、内外研究者の要望に沿うことになる。ただし、東洋文庫と東洋学研究所の初期の契約の制約があるため、その刊行方法については慎重に検討をおこなうものとした。ついては、ウェブ上に未公開のものを含む大英図書館蔵のウイグル文字文獻の一覧表などと合わせて刊行する可能性も検討したい。その中から、文書研究の成果についての論文をこれに付すこととする。

[研究実施概要]

- a) 2010年度に引き続き、目録整備情報をベースとして文獻研究を進めた。
- b) 古ウイグル文を中心とする古文獻の書式整理を通して分類をすすめるとともに、個々の古文獻研究の文獻リスト整備をおこなった。
- c) 漢文との合璧文獻を中心として、2-(1)-③「漢語文獻」グループとの協同研究を実施した。
- d) 「サンクトペテルブルグ東洋学研究所所蔵ウイグル文獻目録(増補版)」(DVD版)作成準備を進めた。

②「近現代中央ユーラシアにおけるイスラームと政治権力」

ソ連解体(1991年)以後、中央ユーラシア近現代史研究は、大きく可能性が開かれた。これまでアクセスが不可能であった多種多様な史料が公開され、また現地の研究者との共同研究や外国人研究者による現地調査も可能になったことは、決定的な意味をもっている。こうした中で、本研究は次の2点を課題とする。

第一に、8世紀以降の中央アジア史を考えると、その政治と社会、文化においてイスラームが果たした役割を無視することはできないが、ソ連時代は無神論イデオロギーのためにイスラームに関わる諸問題は不当に軽視されてきた。いま新たな中央アジア史を再構成しようとするならば、この点を克服することが不可欠である。

第二に、ペレストロイカ以降、中央ユーラシア地域においてはイスラームの復興が顕著であり、イスラーム国家の樹立を目標とする急進派は、世俗主義を掲げる政権との間に鋭い緊張関係を作り出している。このような現代のイスラーム復興主義は、中央ユーラシア史の文脈においてどのように考えるべきだろうか。それには、近現代史におけるイスラームと政治権力との相互関係を実証的に検討することが不可欠である。

[研究実施概要]

- a) 2010年度に引き続き海外における史料収集を継続した。
- b) 新規収集史料と東洋文庫の蓄積してきた豊富な文獻資料とを活用し、研究会の開催などを通して、上記の課題に関する研究を推進した。

③「サンクトペテルブルグ東洋学研究所所蔵内陸アジア出土漢語文獻マイクロフィルム目録のデータベース化」

2002年に東洋文庫が世界にさきがけて入手した東洋学研究所の内陸アジア出土文書マイクロフィルム(全363リール、約25万齣)には、4、5世紀から15世紀に及ぶコータン・サカ語、西夏語、チベット語、ウイグル・ソグド語、漢語、チャガタイ・トルコ語、サンスクリット語、アラビア語、ペルシア語、満洲語、モンゴル語の11言語の文書が含まれている。このフィルム資料の目録をデータベース化してそれを公開することは、わが国だけでなく、諸外国の研究機関・研究者の希求するところ切なるものがある。

本研究は、上記フィルムの中からとくに漢語文獻を抽出してそのフィルム目録のデータベース化を図ると

ともに内陸アジア出土漢語文献の特性を明らかにすることを目的とする。

[研究実施概要]

- a) 敦煌出土文献Reels 256～363中、チベット語文献について、リールに付された各文書整理番号とその齣数との対照作業を継続し、917件の文書を確認した。
- b) 定期的に「内陸アジア出土古文献研究会」を開催した。

(2)チベット研究班

「チベット蔵外文献の書誌的研究(2)」

チベット研究班においては、新たに発見された写本を中心とするチベット語資料を収集・保管し、歴史・文化・宗教の各分野にわたるチベット語文献の体系的網羅的なコレクションの充実をはかることを目的とする。収集した資料については目録化を行い、データベースとして公開すると同時に、敦煌チベット語文献、河口慧海将来文献などととも東洋文庫所蔵チベット語蔵外文献として写本校訂と訳注研究を行い、電子データベースあるいはシリーズ刊行物として公開する。以上の3点により、世界的なチベット学の研究拠点として高い貢献を目指すものである。

[研究実施概要]

- a) 資料収集:2010年度に引き続き、近年中国で新たに発見された10～13世紀のチベット語写本の影印版、チベット語大蔵経文献、蔵外文献の電子版を収集し、その分析と目録作成をおこなった。
- b) チベット人研究協力者の協力のもとに、次の研究を行った。
 1. 筆記体写本の校訂:古いチベット語写本をチベット人協力者の指導を得て校訂し、活字体テキストデータベース作成をすすめた。
 2. 1のデータベースをもとに文献の分析・研究を行った。
 3. あらたに*Studies in Old Tibetan Texts from Central Asia* シリーズをたちあげ、そのvol.1として*Old Tibetan Texts in Stein Collection Or.8210* を刊行した。

3. インド・東南アジア研究部門

(1)インド研究班

「インド刻文史料の蒐集と研究」

インド(南アジア)の刻文研究は、これまでわが国でごく僅かな研究者しかいなかったが、近年、ドラヴィダ系言語について石川寛、太田信宏、アーリヤ系言語について三田昌彦、古井龍介といった若手研究者が育ってきた。刻文は、「史書なきインド」の古代・中世史研究における根本史料であるにもかかわらず、そのようなこれまでの状況から、わが国においては、テキストおよび研究書の蒐集が充分とは云えない。

他方、インド自体での刻文研究は、テキストの出版が遅れていることと、若手研究者が育たないことによって、危機的な状況にあるとさえ云える。また、世界的にも、インド刻文の研究者数は、極めて少ない。

そのような状況に鑑み、わが国の研究機関において、未出版のものをも含めてインドの刻文史料を蒐集し、それを国際的に公開しながら、わが国の新しい研究者の力を結集して、インド古代史・中世史の研究進展を図ることは、わが国のインド研究に課せられた急務と云えよう。

[研究実施概要]

- a) 2010年度に引き続き、東洋文庫に所蔵のない刻文史料や、欠けているものについて、インド独立後の新しい出版物(とくに、州政府考古学局の)を購入、あるいはコピーの形で収集した。トランスクリプトは、許可を得て、マイソールの刻文部でコピーする必要がある。辛島昇(研究班総括)、太田信宏(研究員)、石川寛(研究員)がその作業を行った。
- b) 個々の研究者が独自の研究を行うと同時に、研究班メンバーおよびインドの研究協力者が共同でなしうる幾つかのテーマについて研究を行った。

(2) 東南アジア研究班

「近現代東南アジアに関する史料研究」

近代日本と東南アジアは、明治期の後半から緊密な関係を有し始め、第二次世界大戦期に日本は東南アジアを軍事占領した。また戦後日本は、東南アジアと緊密な経済関係を形成するに至っている。こうしたなかで日本の東南アジア研究も、この40年間に飛躍的な研究の発展をとげた。ただし日本の東南アジア研究は、第二次世界大戦後にいきなり始まったわけではない。すでに大正期より東洋史の東西交渉史の一分野として南洋史が注目を浴び、また南洋ブームの高まりとともに経済関係の文献も出版されていた。そして第二次世界大戦期には、翻訳本も含め多数の東南アジア関係の文献が出版された。これらの文献は、一部の実証研究を除いて、学術的にあまり注目を浴びてこなかった。しかしそれらは、日本の東南アジア観を検討するためのみならず、東南アジア社会を考察する上においても、重要な資料となりうる。本研究は、従来力点が置かれた日本の東南アジア関与という観点からのみならず、当時の東南アジアの社会統合に果たした日本人の役割の視点からその記述を検討し、日本人をはじめ中国人やインド人さらにはアラブ人や欧米人など多様な人々が居住した近代東南アジア社会の特質について研究する。

[研究実施概要]

- a) 近代東南アジアの都市の社会統合に果たす日本人の役割に関する文献資料の収集と整理を行なった。合わせて、第二次世界大戦後に出版された戦前・戦中期の日本の東南アジア関係の文献について、目録作成をすすめた。
- b) 東南アジアの主要都市を訪れ、日本人を含む外来系住民の居住空間の歴史的展開を調査した。
- c) 研究会を開催して文献調査や訪問調査の成果をもとに議論を構築した。その成果は、本プロジェクト終了年度に、出版物として刊行する。

4. 西アジア研究部門

西アジア研究班

「イスラーム世界における契約文書の研究(2)」

ワクフ(宗教的寄進)は、都市や農村の宗教施設を建設するだけでなく、経済基盤となり、政治権力者、名士、民衆の結びつきをつくった。ワクフに関わる、法学書、年代記、地理書などの叙述史料とワクフ寄進文書や調査台帳などの文書史料を収集し、諸地域における実態と歴史的変容を解明する。

[研究実施概要]

- a) 第一期からの継続課題であるヴェラム文書(モロッコの契約文書、東洋文庫所蔵)について、文書解読のための研究会を定期的で開催するとともに、関連資料の収集や調査を行った。
- b) ワクフ文書の総合的研究にむけ、関連資料の収集を行うとともに、研究会を開催した。

C. 資料研究

資料研究部門

東アジア資料研究班

「東アジア資料の研究」

中国、台湾、香港、東南アジア華人社会などに所蔵される文献資料の探索、各国図書館との国際的情報交換・資料交換・人的交流を目指す。

[研究実施概要]

- a) 台湾中央研究院との研究交流、資料交換を推進した。
- b) 宗教神事に関わる民俗芸能について日中間の比較研究をおこなった。

D. 各種研究会・講演会開催

数量／月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
研究会数	3	6	5	5	2	9	15	16	17	79
参加人数	34	232	50	54	7	96	153	321	288	1,235

1月	2月	3月	計
13	14	9	115
113	223	52	1,623

II. 資料収集・整理

A. 資料購入

超域アジア研究、アジア諸地域研究資料研究において必要とされる一次資料を中心に購入を進めた。購入冊数は別添資料の通りである。

区 分	和漢書	洋 書	その他
超域・現代中国研究	462冊	11冊	1冊
超域・現代イスラーム研究	0冊	1093冊	0冊
東アジア研究	682冊	15冊	0冊
内陸アジア研究	87冊	44冊	33冊
インド・東南アジア研究	1冊	37冊	22冊
西アジア研究	0冊	521冊	0冊
共通（継続・大型資料）	1555冊	248冊	25冊
合 計	2787冊	1969冊	81冊

B. 資料交換

国内外各提携機関との間で資料交換を進めた。

区 分	受 贈				寄 贈		
	和漢書	洋 書	その他	計	和漢書	洋 書	計
単行本	1,871冊	288冊	60冊	2,219冊	608冊	433冊	1,041冊
定期刊行物	2,058冊	531冊	—	2,589冊	3,875冊	857冊	4,732冊
計	3,929冊	819冊	60冊	4,808冊	4,483冊	1,290冊	5,773冊

C. 図書・資料データ入力数

2011年4月1日～2012年3月31日までの期間における、新収および蔵書遡及のDB入力数は、下記の通りである。

洋 書	204	トルコ語図書	173
和漢書（含む・中国語）	3,125	南アジア諸語図書	0
キリル語図書	72	雑誌ほか	4,412
ペルシア語図書	877		
アラビア語図書	170		
		合計	9,033件

D. 資料保存整理

2011年4月1日～2012年3月31日までの期間における、保存整理作業は、下記の通りである。

- ・マイクロフィルム劣化防止作業 1,915件

Ⅲ. 研究資料出版

A. 定期出版物刊行

1. 『東洋文庫和文紀要』(東洋学報) 第93巻第1～4号 A5判 4冊(刊行済)
2. 『東洋文庫欧文紀要』(*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*)
No.69 B5判 1冊(刊行済)
3. 『近代中国研究彙報』 第34号 A5判 1冊(刊行済)
4. 『東洋文庫書報』 第43号 A5判 1冊(刊行済)
5. 『超域アジア研究報告』 第8号 B5判 1冊(刊行済)
6. *Asian Research Trends New Series* No.6 A5判 1冊(刊行済)

B. 論叢等出版

1. 『モリソンパンフレットの世界』東洋文庫論叢75 A5判 1冊(刊行済)
2. *Old Tibetan Texts in Stein Collection Or.8210:
Studies in Old Tibetan Texts from Central Asia vol.1* B5判 1冊(刊行済)
3. 『中国社会経済史用語集』(東方書店と共同出版) A5判 1冊(刊行済)

Ⅳ. 普及活動

A. 研究情報普及

1. 東洋学講座
(春 期) 共通テーマ「東洋文庫新館竣工記念講演会」

第 523 回 2011 年 5 月 16 日(月)

「インド文化論—カレーと『ラーマーヤナ』—」

東洋文庫研究員
東京大学名誉教授 辛 島 昇 氏

第 524 回 2011 年 5 月 23 日(月)

「江南基層社会とその地域性

—近代蘇松地方における郷村役の比較を通して—

東洋文庫研究員

慶應義塾大学教授 山本英史 氏

第 525 回 2011 年 5 月 30 日(月)

「現代イスラーム世界の立憲主義と議会」

東洋文庫研究員

京都大学教授 小杉泰 氏

(秋 期) 共通テーマ「東洋文庫新館竣工記念講演会」

第 526 回 2011 年 11 月 17 日 (木)

「Anyuan : Mining China's Revolutionary Tradition」

ハーバードイェンチン研究所所長 エリザベス・ペリー 氏

第 527 回 2011 年 11 月 19 日 (土)

「東洋学の現在」

東京大学教授 姜尚中 氏

第 528 回 2011 年 12 月 10 日 (土)

「楊逸と楽しむ東洋の妖怪ミラクルワールド」

芥川賞作家

楊逸 氏

コメンテーター・東洋文庫研究員 牧野元紀 氏

2. 特別講演会

10月7日(金)

“From the great divergence to the great convergence:

The peculiar trajectory of the Chinese economy,16th-21st century would be relevant?”

[英語・通訳あり]

Research Director, Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales

GIPOULOUX, Francois 氏

(通訳・司会: 濱下武志・東洋文庫研究部長)

10月25日(火)

“Umayyad Legitimacy and the Arabic Ode:

al-Akhtal at the Court of ‘Abd al-Malik ibn Marwan” [英語・通訳なし]

インディアナ大学教授 STEKEVYCH, Suzanne Pinckney 氏

(司会: 三浦徹・東洋文庫研究員)

12月1日(木)

“Before and Beyond Divergence:

The Politics of Economic Change in China and Europe” [英語・通訳なし]

Director, UCLA Asia Institute WONG Bing 氏

(司会: 濱下武志・東洋文庫研究部長)

12月2日(金)

「逆境の中の守りと前進」

—新発見史料より南京臨時政府の外交を見る」〔中国語・通訳あり〕

中国社会科学院近代史研究所所長・研究員 王 建 朗 氏

「東アジア史上の辛亥革命」〔韓国語・通訳あり〕

新羅大学歴史学部教授 裴 京 漢 氏

(司会：高田幸男・東洋文庫研究員)

2月12日(日)

「公開シンポジウム-華北の発見-」〔中国語・通訳あり〕

天津社会科学院研究員 張 利 民 氏

ハーバードイェンチン研究所所長 リンダ・グローブ 氏

南開大学教授 江 沛 氏

南開大学教授 張 思 氏

(司会：本庄比佐子・東洋文庫研究員)

2月15日(水)

「中国参加早期世界博覧会的歴史研究-以中国旧海関出版品為中心」

復旦大学歴史地理研究中心教授 吳 松 弟 氏

(司会：斯波義信・東洋文庫文庫長)

3. 東洋文庫談話会

9月28日(水)

「ブハラのマングイト朝のイデオロギー的性格について：イスラーム王権論からの一考」

日本学術振興会特別研究員(PD) 木 村 暁 氏

11月4日(金)

「孟姜女物語における孤魂救済の主題と儀式的機能」

日本学術振興会外国人特別研究員(PD) 吳 真 氏

2月24日(金)

「19世紀インド洋西海域における奴隷交易監視活動の実体」

日本学術振興会特別研究員(PD) 鈴木 英明 氏

3月22日(木)

「穀物問題に見る16世紀後半の地中海世界とオスマン朝」

日本学術振興会特別研究員(PD) 澤井 一彰 氏

4. 普及展示企画

東洋文庫の多様な蔵書の魅力を広く一般に伝えるために、10月17日に東洋文庫ミュージアムを開館した。そのための展示テーマの企画、展示品の検討を重ねた。

5. 参考情報提供

『東洋文庫年報』2010年度版

A5判 1冊(刊行済)

刊行物の全文データ公開を随時更新した。

B. データベース公開

2011年4月1日～2012年3月31日までの期間における、東洋文庫の図書・資料のデータ(日本語・英語)に対するオンライン検索アクセス状況については、別添資料ご参照。

V. 学術情報提供

A. 図書・資料の閲覧(協力)サービス

数量/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
閲覧者人数	—	—	204人	184人	208人	181人
閲覧図書数	—	—	3,687冊	2,790冊	3,395冊	2,896冊
レファレンス数	—	—	55件	50件	56件	49件

10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
166人	220人	177人	132人	264人	234人	1,970人
2,366冊	3,010冊	2,106冊	1,800冊	7,262冊	3,118冊	32,430冊
45件	59件	48件	36件	71件	63件	532件

B. 研究資料複写サービス

(1) マイクロフィルム・紙焼写真

区分	申し込み件数
数量	187 件

(2) 電子複写

区分	申し込み件数	焼付枚数
数量	850 件	30,702 件

C. 研究情報提供サービス

刊行物の全文データ公開を随時更新した。

D. 情報提供サービス

広く参考となる発行物等を随時提供する。

E. 展示

一般多数の方々を対象とした東洋学の普及を図る手段として、「東洋文庫ミュージアム」を運営した。

1. 基本方針

このミュージアムでは、特に東洋学に興味を持たない一般の方々を主な対象とし(中学生程度の歴史知識を前提)、これらの利用者に、ミュージアム見学を通して東洋学に興味を持つ機会を提供するものである。本ミュージアムは、東洋文庫の蔵書・史料を中心に種々の展示企画を組み立て、常に新たな発見と変化のある展示を心がけている。

2. 展示手法

広く一般の方々にミュージアム訪問の興味を喚起するため、①見学に適切な規模の展示内容とし、②展示の解説は日頃東洋学とは疎遠な利用者にも十分理解できる簡易なものとし、③デジタル技術

等を取り入れた視聴覚的かつ斬新な展示で利用者の興味を引くことに努めた。

3. 施設

温度・湿度管理、窒素ガス消火設備運用により、展示図書・資料の保全に万全を期した。また、併設のギフト・ショップ、ミュージアム・カフェでは、東洋文庫の所蔵資料も紹介し、一般利用者に対してミュージアムの魅力を高め、東洋学普及の一翼を担う、ミュージアムの一体施設として運営した。

4. 展示スケジュール

常設展と企画展の組み合わせからなる展示スケジュールを立て、以下の展示を開催した。

- a) 常設展は国宝と浮世絵を中心に構成されており、保存と集客の観点から、毎月初めに展示資料の入れ替えを行った。
- b) 企画展は一年に3回の頻度で行っている。本年度は以下の企画展を実施した。
 - ①「時空をこえる本の旅」(2011年10月20日～2012年2月26日)
 - ②「東インド会社とアジアの海賊」(2012年3月7日～現在)
- c) 各企画展において展示図録を作成した。全ページカラーで画像を多用し、解説文も平易なものわかりやすいものに仕上げた。A5版でハンディなブックレットタイプである。
- d) 会期中に公開講座(企画展示記念講座)を開催した。2月5日に辛亥革命特別展示記念講演会を開催した。講演者に久保田文次・日本女子大名誉教授、村田雄二郎・東京大教授、司会者に高田幸男明治大教授、閉会挨拶に松尾浩也東京大名誉教授・法務省特別顧問を迎え、講演室は100名超の満員となった。

5. 文庫員ガイドツアー

ミュージアムへの来客サービス・集客戦略の一環として、文庫長・学芸員による館内ガイドツアーを実施し、好評を得た。

6. 学校連携

ミュージアムフリーパスの制度を導入した。年度あたり生徒数×200円の支払いにより、連携校の生徒及び教員はミュージアムへの入場が無料となる。本年度は小石川中等教育学校との連携がスタートした。東洋文庫ミュージアムの展示を学校教育で活用してもらうことにしている。隣接する昭和小学校も児童の団体見学、保護者(PTA)より新聞取材などがあつた。

7. VIP来訪

三菱グループほか主要企業幹部多数、米・英・独・インド・フィリピン等の主要企業幹部など国内外の財界要人、福田康夫(元首相)、蒲島郁夫(熊本県知事)ほか政界要人、E.ペリー(ハーヴァードイェンチン研究所所長)ほか国内外の大学・研究機関の幹部多数など

8. 入場者数

ミュージアム開館以来3月末までの総入場者数は以下のとおりである。↑

月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
入場者数	1,108人	3,145人	2,139人	1,501人	1,370人	1,592人	10,855人

F. 広報普及

東洋文庫所蔵の図書・史料の掲載・報道・放映等の依頼に適宜対応すると共に、ホームページを随時更新し、利便性を確保した。東洋学の若年層への普及を目指し、学校連携活動も行った。

1. 報道実績

ミュージアムに関する報道実績の主なものを以下に挙げる(50音順)。

新聞：全国紙『朝日新聞』、『産経新聞』、『読売新聞』、地方紙『熊本日日新聞』、『北海道新聞』、

専門紙『新美術新聞』

雑誌：『池袋15分』、『学士会会報』、『季刊永青文庫』、『芸術新潮』、『すばる』、『東京人』、『東方』、『マンスリー三菱』、『ミュゼ』、『文部科学時報』『目の眼』、『歴史と地理』など

テレビ：文京ケーブルネットワーク

2. 『東洋見聞録』

東洋文庫の活動をご支援頂いている「名誉文庫員」、「友の会会員」、職員OBほか関係者をつなぐニュースレターとして年に2回発行・頒布した。

G. 国際交流

東洋文庫は、フランス国立極東学院、台湾中央研究院、ハーバードイェンチン図書館、ハーバードイェンチン財団、アレクサンドリア図書館に加え、あらたにイラン議会図書館と協力協定を締結した。また、ハーバードイェンチン研究所と中国復旦大学が共同で開催するワークショップ“Training Program in Historical Materials and Method”に大澤肇研究員を派遣し、中国と欧米の先進的な若手研究者とともに中国資史料学について活発な意見交換を行った。

H. 研究者の交流および便宜供与のサービス

1. 長期受入

(1) 外来研究員の受入

彌永 信美 （フランス国立極東学院 東京支部長）
「日本仏教」 （2011年9月1日～2012年8月31日、延長予定）

呉 真 （南開大学文学院 副教授）
「祭祀演劇中の儀礼文化に関する日中比較研究：宗教学に基づく文学研究」
（2009年11月25日～2011年11月24日・学振外国人特別研究員を終了
2011年12月1日～2012年11月30日、私費）

GIRARD, Frédéric （フランス国立極東学院教授）
「日本仏教」 （2011年9月21日～2012年9月20日、極東学院）

施 愛 東 （中国社会科学院文学研究所副研究員）
「中国民間文学研究」
（2011年5月15日～2012年3月31日、私費）

(2) 2011年度日本学術振興会特別研究員PDの受入

澤井 一彰 （東京大学大学院PD）
「16,17世紀のオスマン朝における物資流通とイスタンブル」
（2009年度採用、2010・2011年度・3カ年間・終了）

鈴木 英明（東京大学大学院PD）

「インド洋海域世界の「近代」：奴隷交易の変容を事例にして」

（2009年度採用、2010・2011年度・3カ年間・終了）

※日本学術振興会海外特別研究員への採用決定につき、2012年2月をもって日本学術振興会特別研究員PDの身分を終了。

木村 暁（東京大学大学院PD）

「近代中央アジアにおけるイスラーム王権とムスリムの政治秩序観」

（2009年度採用、2010・2011年度・3カ年間・終了）

※就職につき、2011年9月30日をもって日本学術振興会特別研究員PDの身分を辞退

小林 亮介（筑波大学大学院PD）

「20世紀前半における「チベットの領域」問題の形成 —東チベットを中心に—

（2010年度採用、2011・2012年度・3カ年間）

池尻 陽子（筑波大学大学院PD）

「チベット仏教僧の思想とネットワークが清代内陸アジア史に与えた影響に関する研究」

（2010年度採用、2011・2012年度・3カ年間）

村上 正和（東京大学大学院PD）

「清代中国社会と演劇文化」

（2011年度採用、2012・2013年度・3カ年間）

亀谷 学（北海道大学大学院PD）

「パピルス文書による初期イスラーム時代統治システムの研究」

（2011年度採用、2012・2013年度・3カ年間）

小林 隆道（早稲田大学大学院PD）

「10-13世紀中国における統治と「文書」—官文書分析による史料批判学の再構築—」

（2011年度採用、2012・2013年度・3カ年間）

今井 就稔（一橋大学大学院PD）

「日中戦争期中国資本家の研究—経済構造の変容と対日関係の模索—」

（2011年度採用、2012・2013年度・3カ年間）

2. 外国人研究者への便宜供与

China	周長山 [広西師範学院]（ほか40名）
Egypt	KESHK, Hassanein [国立社会学犯罪学研究所]
France	GIPOULOUX, François
Iran	SAELI, Majid [イラン議会図書館]
Korea	柳基一 [高麗大学校]（ほか5名）
Mongol	BATSAIKHAN [Mongolian Academy of Sciences]
Singapore	KRATOSKA Pall
Taiwan	黄克武 [中央研究院]（ほか2名）
USA	PERRY Elizabeth [Harverd Yenqing Institute]（ほか4名）

VI. 地域研究プログラム

以下の研究を実施した。

A. イスラーム地域研究資料室

「イスラーム史料情報学の開拓」

史資料の収集と整理：

- a) 現地語史資料の体系的な収集と目録化を継続した。言語別購入冊数(備品受入分)は、アラビア語 121、ペルシア語 207、トルコ語・オスマン語 102、洋書 22。

史資料の利用促進・司書支援：

- b) アラビア文字資料の利用促進と利用者の検索スキルの向上のため、「論文を書く学生のための情報検索リテラシーセミナー」(7/25)を開催した。
- c) 「アラビア文字資料司書連絡会」(第6回)を開催し(3/1)、関係機関・大学図書館の担当者らと、NACSIS-CATにおけるアラビア文字の検索キーの正規化の問題や、リテラシー教育の実施について情報共有を行った。
- d) 「アラビア文字資料の検索方法(NACSIS Webcat 編)」を作成し、HP上に公開した。また、図書館での目録作成作業を支援するため、特殊文字入力ツールを作成・公開した。

史資料の研究：

- e) オスマン民法典の講読・翻訳を目的とする「シャリーアと近代」研究会を計9回行った。「売買の書」部分の訳稿をほぼ完成させ、語彙集の作成を進めた。
- f) 「オスマン帝国史料の総合的研究」研究会は、帝国末期の史料『覚書(Tezakir)』の講読会を計6回開催したほか、「オスマン帝国史料解題」を作成し、HP上に公開した。
- g) 他機関との連携・共催による中央アジア法制度研究会、中央アジア古文書セミナー、オスマン文書セミナーを開催した。

B. 現代中国研究資料室

「現代中国研究資料の収集・利用の促進と現代中国資料研究の推進」

- a) 東洋文庫所蔵及び新規収集の一次資料に基づいた共同研究会(王清穆日記読書会など)を3回、また新たに立ち上げた1950年代中国研究会を2回開催した。
- b) 上述の読書会の成果として手書きの日記の一部を活字にし、「王清穆『農隠廬日記』」として『近代中国研究彙報』に掲載した。
- c) 2011年が辛亥革命百周年にあたるため、関連する内容の市民向け講演会等を二度開催し、社会貢献を行った。
- d) 近代中国で発行された新聞の大型データベース『申報数拠庫』の契約を行った。
- e) 東洋文庫旧近代中国研究委員会(現・近代中国研究班)収集資料のWebcatへの登録を継続し、これまでに約4万タイトルが登録された。これにより、日本の中国研究全体における資料利用環境の整備に貢献した。
- f) 電子図書館・資料関係について、2011年5月に資料研究会「中国における電子図書館・資料デジタル化視察成果報告会」を、同7月に慶應義塾メディアセンター・東大拠点・京大拠点と共催で、シンポジウム「電子書籍・資料のいま：日本と中国」を開催した。国内の学術・出版・図書館・IT産業関係者が報告を行い、百名以上の聴衆

を集めた。

- g) 2012年1月に電子図書館「東洋文庫近代中国関係資料デジタルライブラリー」の公開を開始した。画像をインターネット上で完全公開している資料は2012年3月末時点で146タイトルである。史資料デジタル化の工程が整ったため、今後の大規模デジタル化の道筋を切り開いたと言える。

VII. 受託研究

以下の研究を実施した。

「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」

(イスラーム地域研究資料室委託業務)

- a) 公募による共同研究課題「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の展開：オスマン朝治下において作成された帳簿群を中心として(2008～2012年度)」(研究申請者：高松洋一 [東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授])において、定例研究会「前近代ペルシャ語簿記術論の具体的考察：14世紀簿記術論 *Resāle-ye Falakīye dar ‘elm-e siyāqat* (ヴァルター・ヒンツ校訂) 講読」を8回開催した。2012年2月にビルギン・アイドゥン氏(イスタンブル・メデニエト大学)を招聘し、オスマン朝の写本に関するセミナーを京都で1回・東京で2回開催した。2012年2月から3月にかけて写本資料の調査・収集のために、研究協力者2名をトルコ共和国とイラン・イスラーム共和国に派遣した。
- b) 拠点強化事業「日本における中東・イスラーム研究文献データベース」遡及入力事業(研究代表：後藤敦子)を実施し、当該地域・分野の文献書誌を調査し、データベース化を行った。遡及したデータをNIHUイスラーム地域研究東洋文庫拠点のデータベース検索サイト(http://www.tbias.jp/document_research.cgi)で公開した。
- c) 2011年7月に大学学部生・院生を対象に第1回「論文を書く学生のための情報検索リテラシーセミナー」(共催：NIHUイスラーム地域研究東洋文庫拠点)を開催した。
- d) 「イスラーム地域研究」の史資料センターである東洋文庫拠点を整備し強化するために、関係資料を購入し、利用に供した。

2011年度財団法人東洋文庫特別事業中間報告書

財団法人 東洋文庫
理事長 榎原 稔

2011年4月1日～2012年3月31日までの期間における、財団法人東洋文庫特別事業の概要は下記の通りです。

事業内容

各研究計画に沿って、以下の研究活動を実施した。

I. 特別調査研究並びに研究成果の編集等

A. 日本学術振興会科学研究費補助金による事業

1. 研究成果公開促進費(データベース等)の対象事業

「東洋学多言語資料のマルチメディア情報システム」

[東洋文庫電算化委員会委員長:斯波義信]

2. 基盤研究等の対象事業

(1)「1910～1930年代における日本の中国認識-華北地域を中心に」 [研究代表者:本庄比佐子]
(基盤研究(B)、2009年度採用、5ヶ年間・第3年度目)

(2)「南インドの刻文に見る中世宗教運動の展開」 [研究代表者:辛島 昇]
(基盤研究(B)、2009年度採用、3ヶ年間・第3年度目)

(3)「モノの世界から見た中世イスラームの女性～ガラス器と陶器を中心に～」[新規]
[研究代表者:真道洋子]
(基盤研究(B)、2011年度採用、4ヶ年間・初年度)

(4)「イスラーム法の近代的変容に関する基礎研究:オスマン民法典の総合的研究」[新規]
[研究代表者:大河原知樹]
(基盤研究(B)、2011年度採用、3ヶ年間・初年度)

(5)「近代の地方名士 -マニサ地方を中心に-」 [研究代表者:永田雄三]
(基盤研究(C)、2010年度採用、3ヶ年間・第2年度目)

(6)「内陸アジア出土4～12世紀の漢語・胡語文献の整理と研究」 [研究代表者:土肥義和]
(基盤研究(C)、2010年度採用、3ヶ年間・第2年度目)

3. 特別研究員奨励費(外国人)

「祭祀演劇中の儀礼文化に関する日中比較研究:宗教学に基づく文学研究」

[外国人特別研究員:呉真、受入研究者:田仲一成図書部長]

(2009年度採用、3ヶ年間・終了)

B. 三菱財団補助金による事業

2011年度 採用なし。